

第2回昇仙峡リバイバル会議

日 時	令和2年1月8日(水) 15時30分～17時00分
場 所	甲府市役所4階本部長会議室
出 席 者	東徹委員、内山しのぶ委員、雨宮正英委員、志村忠良委員、芦澤卓夫委員、 須山忠委員
欠 席 者	笹本健次委員、新井達司委員
委員以外の者	依田忠様、小笠原裕二様、小林明様
事 務 局	<甲府市>有賀観光商工室長、渡辺観光課長、森本観光課課長補佐、 中澤観光課係長 <甲斐市>大寫生涯学習課係長(飯沼生涯学習課長代理) <山梨県>山岸観光部次長、菊島観光部政策企画監

次第

1 議事

議題

- (1) 委員の紹介
- (2) 内山委員から視察の報告について
- (3) アンケート調査結果の報告及び実行計画(案)について
- (4) 昇仙峡リバイバルプラン(案)の項目について
- (5) その他

2 事務連絡

3 閉会

【委員長】

今日は初めて出席される方もいらっしゃいますので、簡単に会議にあたりましての考え方をご説明させていただきますと、かつていい時代があったのだ、あの時代の昇仙峡を取り戻したいのだという考え方をやめ、これから次の世代に、山梨あるいは甲府の宝である昇仙峡をどのように引き継いでいくのかという点で話し合ひましょう。あの頃こうだったのだ、良かったのだと言っても戻らないですよ、いや戻そうとしていないわけです。リバイバルという意味に反しているかもしれませんが、リバイバルというよりは、次に引き継いでいくために何をしていけば良いのかということをご議論いただくような会議にしたいということで前回申し上げたかと思います。今日初めてご出席の方もいらっしゃいますけれども、こういった状況で臨んでいる所存ということをご承知お

きいただければと思います。

それでは、早速議事に入らせていただきたいと思います。

議題(1)「委員の紹介」についてですが、今回からご出席の方もいらっしゃいますので、前回第1回でご挨拶いただけなかった委員の皆様に、改めて自己紹介をお願いしたいと思います。

【委員・委員以外の者】

自己紹介及び一言

【委員長】

ありがとうございました。それでは、第2回もどうぞよろしくお願いいたします。議事に入らせていただきます。お手元にございます進行に従って議事を進めさせていただきますが、本日はアンケート調査の報告が主になっておりまして、最後にその他となっておりますが、委員長の方針としては必ず委員の皆様にはご発言をいただくということでございますので、一つ一つに対する質疑とは別に、最後のその他のところでお一人ずつコメントをいただければと思いますので、よろしくお願いたします。

それでは、議題(2)「内山委員から視察の報告について」の議事に入りますけれども、12月に大学生、それから本日ご出席の委員がそれぞれ別のかたちで視察を行いました。学生の調査結果についてはあとでご覧いただきたいと思います。まずは委員から、先日の視察についてお話をいただきたいと思います。よろしくお願いたします。

【委員】

先日、久しぶりというか、20年ぶりくらいに調査の方に行きまして、子供の時にイメージしていた昇仙峡と随分感じが違っていたなと思いました。それは、過去がガチャガチャしていたり、人が多かったりしていたということもあると思うのですが、正直今はちょっとしょんぼりしてしまったな、という印象でした。それがどのようにしたら集客に結びついていくのかを私なりに考えました。

まず、最初に入ったところが昇仙峡の入り口だったのですが、長潭橋の入り口のあたりの入り口感が全くないということです。長潭橋は歴史的有名建築だと思うのですが、橋もあまりわからない感じになっていて、入り口が本当に勿体無いなという感じがしました。

昇仙峡の入り口をもう少し入り口感を出すとともに、その後に続く道路の整備が必要かなということで、またこのあとでお話しさせていただきます。やはり入り口というのはとても大切なものだと思います。今は車で上の方に上がられている方が多く、下から歩く方が少なくなっているということを伺いましたが、視察時に久しぶりに参加者の方と下から歩かせていただいて、気持ちよさを改めてすごく感じました。歩いて上がっていただくことにより、昇仙峡のよさを皆様に感じて頂くことができるのかな、と思います。

そのためにまず入り口から回るようなリニューアルができないかな、と思いました。

予算の関係もあると思いますが、日本の第一人者であるランドスケープデザイナーで団塚栄喜さんという方がいらっしゃるのですけれども、例えばそのような方に入り口だけでも構築していた

だとか、そのようなプランもありかなと思います。

また、神社があったと思うのですが、折角のパワースポットなのに気持ち良い感じに祀られていなかったなという印象を受けまして、このようなことがすごく大切なのではないかという印象を受けました、もう少し整備しても良いかなと思います。

入り口から繋がっている道路は車が走っている所なのですが、車を遮断させて歩くような道路にしたほうが良いのではないかと思います。そのようにして、歩行者が復活するということであれば、馬車とかバス、ミニカーのようなものでピストン輸送して、足の悪い方などを軽車両でつないでいくのはいかがでしょうか。また、サイクリングができるように、入り口にレンタサイクルを置いて自転車でも行けるようにするとか、何かそういった向かうためのツールが必要ではないかなと思いました。また、歩きながら溪谷が綺麗だなと感じたのですが、溪谷に降りられる所があまりありませんでした。歩きながら降りて、写真を撮れるようなポイントがあってもいいのではないかなと思いました。降りて石に触ったり、水に触ったり季節によっては花を愛でたりとか、ただ歩くだけじゃなくて何かそういうことができるような、何かがあればいいのではないかなと思いました。また、歩きながら説明していただいていると、雄大な石があるかと思うのですが、案内が小さくもったいないかなと思いました。雄大な石と樹木が素晴らしいですが、両者が合体しているような所があったりして、パワースポットだなあと思う所がいくつかあったのですが、そういうところが全くポイント化されていなくて、もうちょっと上手くポイントにして、来た方にアピールできないかなと思いました。それをもしするのであれば、研究者ですとか、そういった方達とともにパワースポットに名前をつけたりして、仮に「昇仙峡20のヒーリングスポット」と題して昇仙峡の中でも特に自然的価値の高い、味わうべき場所を作ったりしてそこを歩いていく、みたいなイメージがいいのではないかなと思いました。

それから、集客なのですが20～30代の方々が子供を連れてこられるような場所でない観光地としてはちょっと弱いかないかなと思いました。子供たちがお弁当を持って寛いだり、楽しんだり、集いたくなるような公園的なスペースがあっても良いのではないのでしょうか。また、今キャンプがすごく盛んなのですが、例えばキャンプができるような場所を作るとかそういう家族が集える場所とか、何かそのような導線みたいなものが必要かなと思ひまして、ベンチやテントを整備したり、本当にキャンプができるのであれば、キャンプが楽しめるような、何かそういうファミリーが集えるような、すごく大きな公園というようなイメージで再構築してもいいのではないかなと思いました。

そういったことで、今ある看板なのですが、正直すごく古くて分かりにくいです。再構築した後で、適材適所に分かりやすい看板と、どこに歩いていけば良いかわかるような看板の刷新というのが必要だな、と色々な看板を見て思いました。

それから、昇仙峡というと秋に観光客が多いかと思ひます。冬はちょっと難しいかと思うのですが春と夏の集客を増やすような施策のようなものをしてらどうかと思ひました。秋のイルミネーショ

ンをやっているかと思いますが、秋は観光客がいらっしやるので、あぁいったイルミネーションを逆に夏にして、夏にそういったイベントを打ったりするといいかと思います。また、羅漢寺の仏像が壊れたので、例えば「羅漢寺の仏像祭」というようなことで、若い方に仏像はどうかと思うのですが、仏像好きな方が沢山いらっしやるので、そういうお祭りをしてはどうかと思います。また、山桜ですとか、春と夏に集客できるイベントがもう少し増えたらいいのではないかなと思いました。

大体そのようなところで、あとはロープウェイから上がったところの食事ができるエリアとかがもう少し、ファミリーが集えるような、気が利いた感じの形になったらいいかなあと、そんなことを思いました。若い家族の方たちが来るような施策や考え方で、色々なところを改善していけばいいのではないかなと思いました。以上です。

【委員長】

ありがとうございました。ただいまの調査報告について、何かご質問があれば。

私どもも、ロープウェイ組と、下の長潭橋から上がっていくコースと2つの班に分かれて調査を行いました。そのアンケート結果については後程の集計をみていただければと思います。私も下から上っていくほうの班に同行したのですが、やはりゲートウェイとして、どこがスタートなのかというのが分からない、連れていかれるから「あそこか」とわかる程度で、「ここで降りるの」「どこからスタートなのか分からないね」というのが、だいたい最初の話題でした。ゲートウェイの大切さというはあるかと思いますが。あとは、今回かなり学生たちの人数がいたのですが、20名くらいだったので、「はい、車よけて！」と声を掛け合いながら、だいぶ気を遣いながらの歩行だったのですが、生活道路として開発されたということがあるので車を通さないということは無理だろうことに気づくと、「じゃあもっと歩けるような川寄りの専用道路ができないか」という声もでていたので、危険を避けつつ、川沿いをどうやってゆっくり歩いてもらうかという話は若者たちもだいぶ話をしていました。また、若い者はファミリーや若者が来る場所とは思わない、これからは高齢者なのだと、概ね両校の学生が思っていたのです。皆、ターゲットは高齢者だ、この場所は高齢者が来る場所だという先入観を持っているのですよ。これがなかなか面白いところで、今日の報告では出てこないところかと思いますが、そうなるとうち少し歩くのに易しい道でないといけないよね、休憩スペースがないよね、ゆっくりお茶飲めるスペースがないよね、あるいは下にウッドチップなどを敷いてあげればアスファルトより歩きやすいよね、とかそういう意見が歩きながら出ていたので、面白いなと思いました。意図は何も伝えていなかったのですが、若者が来るような魅力はどうかという声かけをしていないからこそ彼らは、先入観として、昇仙峡ってこれから高齢者がハイキングに来るところなのだという思い込みが両校とも強かった。なので、川に降りようという発想は出てこないわけですね。危ない、石は落ちてこないだろうかと気にしていたくらいで、念頭には高齢者にとって優しい観光地であったほうが良いというのが若者の意見だったというのが面白い部分だと思います。違ったターゲットなのでどのように最後持っていくかというのは議論の余地がありそうです。

それでは続きまして、議題(3)「アンケート調査結果の報告及び実行計画(案)について」事務局から説明をお願いいたします。

【事務局】

議題(3)「アンケート調査結果の報告及び実行計画(案)について」説明

－ 要旨 －

- ①観光客向け、大学生向け、事業者向け、観光事業者向けに実施したアンケート調査結果を報告した。
- ②アンケート調査結果を踏まえ、課題の整理を行った。
- ③「観光客が訪れたいくなる昇仙峡」を目指し、昇仙峡の様々な魅力を高めることにより「観光客」と「事業者」の好循環を生み出していくことをビジョンとしている。ビジョンの柱として、6つを提示した。
 - (1)観光客に対してより消費したくなる仕掛けを行う。
 - (2)観光客が多様な楽しみ方でかつ長時間滞在できる仕掛けを行う。
 - (3)年間通した四季折々の昇仙峡を来訪してもらえる仕掛けを行う。
 - (4)新規観光客の獲得のため、若い世代・訪日外国人を対象にした仕掛けを行う。
 - (5)昇仙峡にしかない、「ならでは」の価値を生み出す。
 - (6)ビジョンを実現するための自主組織の構築を行う。
- ④実行計画として、課題とその対応策を示した。

【委員長】

ありがとうございました。実行計画及びアンケート調査の結果についてお話しいただきました。質問があればお願いいたします。

【委員】

この会の事前の打ち合わせや、第1回の皆さんの話を伺った中で、そこで見えてきた課題や改善点と、今日の委員の視察報告やアンケート結果から出てきた課題がかなり重なっているわけですね。その中で、最もだと思ったのは、入り口をもう少し何とかする、直せないのかなというのは思いましたし、どうしても昇仙峡というのは溪谷美という切り口で売ってきた時代が長かったわけですが、最近テレビ番組などで取り上げられるのは必ずしも溪谷美だけではなくて、ヒーリングスポットというような、癒しの場所であるという切り口で紹介されることが多くなってきたなと思いますので、そういうものも取り入れていくべきということは、報告を聞かせていただいて思いました。ただ、イベントをたくさん開催してみたらということに関しては、イベントも必要だとは思いますが、あまり単発イベントに頼るのはどうなのかなと。リピーターも作れるようなイベントをしっかり計画的にやっていくのはいいけれども、一時の賑わいだけを追い求めていくと、主催者が非常に苦勞するのと、後が続かない。甲府市観光協会や甲府市がいろいろなイベントを主催しても、極端に言うと、後で虚しさを感じてしまうようなこともありますので、そういったところは気を

付けながらやっていく必要があるのかなと思いました。結局このアンケートも含めて、課題をみてみるとかなり広範囲で、ハードもソフトもあれば、ソフトの中でも販売側の意識や行政側の意識など、ものすごく広範囲な課題があって、今までいかに集中的に議論されてこなかったかということが分かる。これらは今後整理していくわけですが、こんなに幅広い課題が出てくると、委員会の中で片づけていくというのはほぼ不可能だと思いますので、やはり何らかのかたちで優先順位をつけ、改善策を年度ごとに区切りをつけていかないといっぺんに行うのは無理だということ。それをこれから議論していけば良いと思いますし、最後のほうで事務局からも説明がありましたけれども、やはり主体的に取り組んでいく役割分担も不可欠だと思います。ぜひそういう観点をいれながら議論を進めていただきたいと思います。それから余談になるかもしれませんが、実は今年の仕事始めの時に、知事にお伺いした際に、一番初めに言われたのは、「昇仙峡を何とかしましょう」ということだった。今年は会議も開催するし、具体的な行動計画も作ってやっていかないといけない、と言ってくれた。甲府の市長さんも、新年の経済団体の会合で、甲府市内の500以上の団体を集めた新年のスピーチの中で、昇仙峡を今年は何とかしたい、優先順位が高いと言っている。そういった全面的なバックアップ体制をつくってもらっているのだから、我々としても、できるだけ早く方向性を決めて、役割分担と優先順位を決めながら取り掛かっていったほうが良いなと思います。

【委員長】

ありがとうございます。気を付けないといけないことは、全国どこの観光地でも言えることだよなということ、昇仙峡特有の問題というのはある程度仕分けをしていかないといけないというのが一つあると思いますし、ネガティブな要素とポジティブな要素が混ざっていると思うのですね。例えばトイレが汚いというネガティブな要素に対して、トイレを綺麗にしたところで人が増えるわけではないということです。要するに、嫌だという人が減って良かったねと言いそうなのですが、実は観光客は増えやすい。食べ物が美味しいからといってくる人はいるかもしれませんが、トイレが綺麗だからと言って来る人はいない。つまりマイナスをゼロに戻す努力と、それから今アンケートでたくさん出てきたのですけれども、楽しむ場所がないよねなどの、要するにゼロの意見をいかにプラスの要素に作り上げていくかということの2つに仕分けないといけない。この種の仕事をしていますよく思うのは2つの意見のうち悪いところを直そうというほうが強くて、悪いところほど予算がつくことというようなおかしい現象になっているのですね。要するにつつまれなければいいのだという悪い癖があるなと思うのですけれども、「これはおかしい」と言われなければいいやという癖が大人はどうしてもついてしまう。それに対して若者は勝手な物言いをすることに慣れていまして、「もっと面白いものないの」と平気で言うてくれるのですよね。「だから人が来ないのだ」と簡単に言うてしまう。プラスをどうやって作り出すかということ、マイナスをどう除去するかということ、今委員がおっしゃったように、優先順位をつけて、役割分担をしながらどう組み立てていくかということが課題かなと考えます。それからイベントというものは、やる方はすごく疲れるのだというお話だったので、確かに主催をすると、いろいろと単発性で終わってしまうというのは全国的にいわれていることで、ある程度持続的あるいは継続的に楽しめて、別にイベ

ント期間でなくても楽しめるということと、それからメリハリですからこの時期はこういうイベントをしたいねということを考えていくというのは大事だと思います。それからやっぱり我々はあれだけのすごいコンテンツになってしまうと、あれは溪谷美なのだと決めつけているのですが、観光資源がいかにかアトラクション化するかというのは意味付けなのです。昨日まで初詣に地元の人が集まるような神社がいきなりパワースポットになったりアニメの聖地になったりするのは何を意味しているのか。それはある人たちにとっての愛すべき意味が付与されて共有されたということなのです。だから、深い意味がないから二度と来ないと言われる。見ればわかる、きれいな岩でしょ、で終わってしまう。紅葉でしょ、で終わってしまう。だからリピーターが来たいという気持ちがなくなってしまう。それでは何をやるのかということ、これから考えていかなければならないのですけれども、要するに、我々は溪谷美というものを具体的に考えすぎているのではないのか。だからと言って、調査結果を見れば分かるのですが、大学生真面目だなというのが分かると思うのです。私ももちろん普段からの教育で、チャラチャラしたことを言うなよ、おじさんたちはどうしても若者らしさということを求めてくるが、君たちは真面目でいいのだ。いつも具体的に考えなさい、ある種の専門教育を受けているのだからと。だから意外と真面目な答えが出てくるのです。要するに若者をなめるなというのは、若者受けする大人の意見というのが一番危険なのです。意外と若者は真面目に取り組んでいる。その結果、あまり来たいと思わなかった理由は何なのかということ、見れば分かるよねということでは駄目ということなのです。それは可能性的にパターンの問題なのかなというように思います。本当に、先程おっしゃったように溪谷美だけではないのではないかとことをどれだけ深堀できるかというのが、大きな課題を生んでいるのだと思います。他にご意見ございませんか。これが本日のメインテーマなので。

【委員】

先程のお話を聞いていて、昇仙峡という土地に何が一番欲しいのかを考えると、やはり懐だと思います。溪谷沿いでは、場所によって30、40メートルの幅があるのです。昔から昇仙峡は魅力が足りないと言われていましたけど、棧橋をかけて、そこから眺望を眺めるとか、水の音を聞くとか、そういう場所をつくってあげないと、昇仙峡というのは、どんなに努力をしても土地が狭いものですから、お店の経営者も皆そうですけど、小さい土地でも自分たちが商売してきた場所を大事にしていますから、大型開発はできないのですよね。お客さんを楽しませるとか滞在時間を長くするには、地面が必要なのです。スペースが。そのスペースがどこにあるかというのは、長潭橋から川幅が広がって、脇に逃げられる場というのはあると思うのです。そのあたりを考えていたのですけれども、この文章の中を見ると、「対応策・誰が」と考えたときに行政が一番多いのです。甲府市と県の行政がやらなくてはならないのではないのか。観光協会が進めるよりも、行政が支援していかないとならないのではないのか。対応策というかたちの中をみていくと、これは長年の提案でもあったわけです。何年前からずっとこういうことを言いながらも、行政がよしと腰をあげてくれないと、何もできない。川の音、水の流れ、あるいは新緑や紅葉、そういった楽しませるものを十分に見せる場所を確保しないと駄目だと思います。そうしないとお客様を満足させるだけのものができません。狭いところで、山と山の谷間にあるわけですから。ロープウ

ェイで上がった山頂は広がっている。ところが溪谷沿いでお客様を楽しませようとすると、そこにはやはり面積がない。お客さんが川の真ん中に立って、水の流れを見ながら、ストレスを解消してもらえそうな場所があればと思っている。今、考えているのは、東京のストレス社会というのを見ているのですけれども、やっぱりあれだけ人口が増えて、今からオリンピックもある。4,000万人のインバウンドの人々が一同に会して一気に人口が膨れ上がるわけですよ。それだけでものすごいストレスだと思う。そういうことで、今都会から離れて、ストレスを解消するためにのんびり過ごしたいと思っている人がいるわけです。昇仙峡には、高尾山にない溪谷美や奇岩があり、紅葉もよし、東京から1時間半～2時間で来られるわけですから、その需要をしっかりと追っていくべきだと思います。気を付けないといけないのは、誰がやるのか、優先順位を決めてもらっても、それを誰が進めるのか。対応策の中でそれを行政がどんどん進めてほしいと思います。そしてなんとかものにしていきたいと考えています。

【委員】

今、委員がおっしゃっていたことを聞いて、なるほどと思ったのですが、一度立ち止まって、何が不満足なのかと考えたときに、歩いて見るのはいいが、やっぱりスペースがないというのが大きいのかなと思います。スペースがないから、滞在時間が少ないし、見ることはできるけれども味わう時間が少ないというか、楽しめない。そこが原因なのではないかと思いました。高尾山にはいろんな方がいらっしゃる。家族連れもいらっしゃる。しかし、昇仙峡はわりと年齢の高い方しかいない。これはやはり、どうやってお客さんを連れてくるのか考えないといけないですね。

【委員】

やはりいいものを提供することを考えると同時にスペースの提供というのも考えなければならぬ。お客さんを楽しませるようなスペース、食事、トイレ、このあたりは最初に手をつけなければならぬと思います。

【委員長】

先程も話したように、ネガティブな部分というのは本当に最低限の部分だと思うのです。もう一つは、若者と高齢者に分かれてしまっているという結果だったのですけれども、やはり若者は基本的には我慢をしないので、自然が美しい山の中だから美味しいものがなくてもいいよね、とは思わないのです。どんな山の中へ行っても美味しいものを食べたい。甲府市内に帰ってきてお土産を買えばいいじゃないか、とは思わないのです。そういった贅沢な考えなので、これから成長していく世代というのは我々の親世代と違って我慢をしないのです。そういう意味で、これから来客してくれる人たちの、隠れた不満なり、あるいは明言されている不満は解消するとともに、先程も言いましたが大事なことは、来る意味が分かること。要するに、私はスペースというよりもむしろ、「東京都民のストレスを癒す場じゃないか、ここは」とおっしゃられたことの方が意味は大きくて、つまり、綺麗な自然を眺めに来るのだったら、全国どこでも行けるじゃないかというふうになります。そうすると、高尾山みたいにと言った瞬間に、昇仙峡とは競合関係になるので、そ

れなら高尾山でいいじゃないかとなってしまいます。あるいは美味しいもの食べられますよ、という食べ物勝負になったときは負けてしまう。そのときに、果たしてターゲットは東京都民なのかということも考えなければなりません。つまり、その都民にとって考えてみれば癒し空間になるけれども、地元山梨県の人たちにとってはどういう場所なのだろう。まず誰にとって、どんな意味がある場所がこの昇仙峡なのかということを考える。つまり、闇雲に「観光客」というターゲットは存在しないわけです。例えば地元の人にとって、昇仙峡はどのような場所で、どうすればファミリーで季節ごとに行く場所だよ、何度でも発見がある場所だよ、となるのか。東京から来ると競合が多いですから、このくらいの景色だったら次は違うところへ行こうとなってしまふかもしれない。綺麗な場所は世界全国どこでもある。だから意味が消費されていない。つまりここにくる意味って何なの、昇仙峡を訪れる意味って何だろうということがはっきりしていないといけないうし、溪谷美ではない何か、という意味付けの問題をつくらなければ意味がない。それと、例えば都民にとっては身近な癒し空間なのだ、あるいはパワースポットなのだ、というのはいいですけども、そういう意味付けもなしに、「ここは気軽に来ることができて、自然美がいいですよ」と言っても、「あ、そう」で終わってしまう。変な話ですけども、だから新宿発の昇仙峡バス旅行に参加しても、「昇仙峡の滞在時間が40分ですので、早くバスに帰ってきてください」と言われるのですよ。今は個人で来たお客様を想定しているけれども、滞在時間の短さはツアーが悪いのです、はっきり言うと。だから長潭橋から誰も歩かないのですよ、ツアー客は。いきなり上まで連れていかれて、バスに戻ってきてくださいね、となっている。この現況を誰もつかないというのは一体何なのかということなのです。つまり、自分で滞在時間を選択できない方のウェイトが多いということはどう考えるか。それはそれとして、個人客を皆さんの対象とすると、来る意味をつくること。何のために行くのかという意味付けをしなければならぬと思います。そうすると溪谷側からすると狭いけど、ロープウェイの上は広いよねという違いがある。学生が班で分かれたように、上の班と下の班でも魅力が違うのではないのかという考え方も出てくるわけです。大事なのはやはり、どういうターゲットに対して、来る意味をつくれるかということかなと思います。

【委員】

今回のアンケート調査を見て、私たち運営側として胸がチクチクする部分も多かったわけですけども、現状昨年の11月にInstagramを用いて、お客さんがどういうふうに昇仙峡を見ているのかというのを20日間くらいの期間で投稿をしてもらったら、やっぱり一番多いのは覚円峰なのです。全部で2,000ちょっとの投稿があったのですけれども、その中でだいたい皆さん同じ場所から撮っていたのです。だから、今年からですけど、春夏秋冬四季があるので、ポイントをこちらのほうで決めて、どこを撮ってくださいということで、当然どこから撮ってもいいのですけど、どこの景色が一番いいかというのを見たいなと思って。2~3年かけて行えば、10か所くらいポイントができるので、そこを昇仙峡の1番の見どころとして知りたいというのが私の計画の中ではあるのですが。基本的に、私はロープウェイの下にいますのですけれども、だいたい聞かれる話が、「昇仙峡はどこへ行ったらいいの」ということ。まず、ロープウェイまでは目指していた

だくのですが、降りていただいた後、「これからどうしたらいいの」ということを9割方聞かれます。降りたところで、「仙娥滝はどうやって行けばいいの」という方が8割方くらいいる。そういうことでやっぱり、お客さんに対してすごく不親切な観光地なのかなというところが最近よく分かってきたところですよ。昇仙峡は長い溪谷で、ロープウェイより上の方には奥昇仙峡といって、金櫻神社や荒川ダム、板敷溪谷、それから黒平には2箇所くらい大きなキャンプ場もあるので、そういうところをうまく活用して、1日楽しませる、そういう物語作りをこちらのほうでも作るし、お客様目線で考えていかないと、滞在時間が30～40分だと本当に来て終わってしまう。3年ぐらい前に秋の紅葉のいい時期に3日くらい荒川ダムでカヌーを実施したのですが、すぐいっぱいになったのですね。ただそれが継続できない。費用もかかるし、行政の力も借りてやったのですが、ただ、来た方の満足度は100%なわけです。だからこちらにも書いていますけど、アクティビティというか、体験、子どもが来て楽しむものをやると必ず親がついてくる。毎年夏にロープウェイの前の川で、わんぱく広場というイベントを6年くらいやっているのですが、夏休み1か月ずっとやっておりまして、子どもはかなり喜んで帰っていく。こういうことで少しずつですけど、昇仙峡で川遊びしたよという思い出を作り、大人になったら来てね、というかたちで。ライトアップも、春夏秋の年3回やっていますけれども、来たお客さんは、肝試しのような店も開いていない暗い中で、ライトアップだけ見て帰ってしまうというのが現実なのですけれども、日にちを短くして、3日くらいの盛大なイベントにすれば、もう少し集客率を上げられるのかなと思います。あとは今まで秋に開催していたほうとう祭りを、3年程前から春の集客がないときに開催しており、2日間で3,000人近くの集客があって、今年でもう11年目になります。そうやって少しずつ植え付けていく。本来は地元のお店のほうとう屋が出てくれれば、それが美味しければ、市内の方も、県内の方もまたそれを食べに行く。そういうことを目的にやっているのですけれども、なかなか自分の店が忙しいと言って出てくれないのが現実で、もっと地元意識で、そういう場所を出店するのも宣伝なので、そういうことが必要かなと。ここに書いてありますけど、そうやって美味しいほうとうを出してもらえれば、お客さんはまた昇仙峡でほうとうを食べようよ、というふうになってくれればありがたいなと考えているのですけれども、なかなか空回りしているというのが現実です。

【委員長】

そう簡単にはできないというか、現場ならではの悩みというものもあるかもしれませんが、何とんでもやる方は大変なのでね。あれをやろう、これをやろうとアイデアを言うのは簡単なのですが、やるのは皆さんですからね、と最終的にはなってしまう。だからこそ推進体制をつくるというのは最終的には大事になってくると思います。たぶん意見というのはたくさん出てくると思うのですね。だけどそれを優先順位と役割分担を決めながら進めていく。ただし、役割分担を決めても地元の人でどれだけできる人材と余裕があるのかということ、厳しいということなのですよね。その辺も含めて、この計画でも最後のほうに出ていますけれども、推進体制を継続的に、これからの昇仙峡を担っていく人たちの組織体制づくりというのが最大の課題かなと思います。つまり、担い手とは誰なのだろうということ。それとやはり今の話でも出てきましたが、地元の人にとって、つまり最大のリピーターとなるのは地元の人なので、地元の人たちがリピートできる、子どものころから

慣れ親しんでいって、大人になったら今度は自分の子どもを連れてくるような、足しげく通う場所である。あるいは、東京から来る人達から見れば、リピーターと言っても年単位で、そろそろ昇仙峡行きたくなつたねと言ってもらえるようなところが、そういうメリハリが重要なのではないかと思います。そうすると、リピーター、リピーターというけれども、圧倒的に、地元の人にとって、来る意味を作らないといけない。むしろ、失礼ながら甲府の市内でほうとうを食べるより、ほうとう祭りに行ったほうが美味しいし、たくさん食べられるよねと。これが楽しみで毎年来るでも良いと思うのです。甲府の市民の人たちにとつたら溪谷よりもむしろお祭りが楽しみになるのかもしれない。それでも全然構わないと思います。さっきも言いましたが、そういうメリハリですよ。魅力も顧客層も一緒くたにしないというのが、すごく重要なのかなと思います。

【委員】

委員がいろいろと話してくださいましたが、その通りです。私は今日の会議に出て感じたことなのですが、昇仙峡で秋に昇仙峡インスタグラムのフォトコンテストというのをやっていますが、その中で甲府市長賞をとった作品がありまして、通常、滝の写真を撮るものが多いのですが、そこへワイングラスを重ねて、遠目から撮って、ワイングラスの中に滝が入っていくような、そんな写真を撮っておられました。私たちもそういう切り口でもって写真を撮るということにハッとさせられる部分がありまして、よく考えますと、現状、私たちは在ることを日々こなしていく、それだけで過ごしてしまうことも多いのですが、ハッとするものを見ると、こういうこともあるのだな、こういう考え方もあるのだなということを新たに感じることができました。特に、今回こうして学生の方にアンケートを取ってもらって、これもちょっとショックだったのですが、実際昔よりも若い方が増えていると思っていたのですが、そうでなかったということで、特に若い方に来ていただかないと、将来の観光地の姿というのがないと思うのです。歳を取った方がいらしても、その1回で終わりの可能性もございますし、若い方に来てもらえれば、リピーターとして次の機会もあるということを見ると、若者世代に訴えていくというのは非常に重要なことだと思います。それで今回学生の方も1回アンケートにお答えいただくために来ていただいたのですけれども、今回だけに留まらず、また何回か来ていただいて、貴重な意見やハッとするようなアイデアをいただけたら今後にも繋がっていくのかなと思っております。

【委員長】

先程、写真スポット、いわゆるインスタ映えというお話がありましたけれども、やはりインスタ上に出ているのと同じ写真を撮りたくてわざわざ撮りに行くのです。そうするとやっぱり滝はこう撮らないといけないということになってしまうので、それはある意味発見がないので面白くないと我々は思ってしまうのですが、それを逆手にとって、アクティビティ化してみたらどうだろうか。あとで紹介しようと思ったのですが、山中湖のDMOでフォトハンティングというのをやり始めようということになっていて、実はそのプランニングは、私のゼミ生がいろいろと案を考えたのですけれども、パンフレットに載っている写真と同じ写真を撮り、2時間以内で撮れた枚数で何ポイントだとか、全部撮り終えた後のタイムを競うだとか、ロゲイニングというある種のスポーツがあるのです。

実はロゲイニングという言葉は協会を通さないと使えないので、山中湖さんは苦肉の策で、自分たちの名前でフォトハンティングという名前をつけて実施しているのですが、簡単に言うとパンフレットに載っている写真の通りのアングルでまず写真を撮るわけです。そうするとただ歩くだけではなく、フォトスポットを拾い歩きして、2時間かけて滝の上まで歩いてくる。そういうある種の簡単なスポーツになるわけです。こういう考え方もありかなと。だとすると、その写真スポットを探し、一つのコースにまとめるために、両校の学生さんたちに来てもらって、ここがいいよというコースデザインまで関わってもらおうというのはできるかもしれません。あるいは、もう一つは写真を撮る楽しさもそうなのですが、学生たちは奇岩を見ていて「あれがサルには見えないな」とか、「オットセイに見えないよ」などと話していて、ファミリーで歩いているとそういう話題で歩くわけですね。結局、歩く楽しさは、あれが何に見えるのかをお互い話し合いながら歩くことなのかなと思います。一番学生たちが楽しんだのはそれなのではないかなと。そこでちょっと考えたのですが、学生から「これって自分たちで名前をつけてはいけないのですか」という意見がありました。例えば期間を決めて、「これは〇〇岩」という写真を投稿してもらい、それが採用されたら1年間命名権を与え、ロープウェイに掲示するというのも良いだろうと思う。観光客がただ見せられるのではなく、自分達が参加・発見する楽しさがあったら良いと思う。そのような、お客さんが参加できるきっかけというのがあると、逆に他の人も参加してもらい機会が生まれると思いますので、今までのかたちのイベントではなくて、お客さんが気軽に参加できるアクティビティ型のイベントを考えたほうが面白いかなと思いますね。まさに自分のオリジナルの写真を撮ってもらうのが一番良いのですが、皆さんのインスタを見ていると、本当に人が撮った写真と同じ写真が撮れないと嘆いていることが多いので、そういったものも良いかなということで今学生が提案をまとめておりますので、提案をさせていただきたいと思います。

時間も迫ってきましたので、続いて事務局より議題(4)「リバイバルプラン(案)の項目について」事務局から説明をお願いいたします。

【事務局】

議題(4)「昇仙峡リバイバルプラン(案)の項目について」説明

－ 要旨 －

第1章 昇仙峡リバイバルプラン策定にあたっての「背景」や「目的」、「位置づけ」を明記する。

第2章 今回のアンケート調査結果やデータ等から昇仙峡観光の現状と課題を考察する。

第3章 前章を踏まえての昇仙峡観光の理念と目標などを定める。

第4章 今後の施策の展開について、その体系とスケジュールをまとめる。

第5章 リバイバルプランの今後の推進体制と検証・評価体制について定める。

今回は項目出しまでとなり、次回の第3回昇仙峡リバイバル会議でプラン案を提示する。

【委員長】

今回は項目だけということで、これに沿って中身を埋めていくのが次回からの作業となるわけで

す。お時間もだいぶ過ぎて参りましたので、これに対して直接の質疑は控えさせていただき、その内容も含めまして、最後に一言ずつ、手短で恐縮ですがご意見を頂戴したいと思います。

【委員】

今説明していただいた中で、4番の今後の施策展開というところが一番大事になるかと思うのですが、その中で、先程の説明でも優先順位がありましたけれども、そういった観点ではなくて、昇仙峡の広範囲な課題に対して、少しずつやっていっても、外から見たら何が変わったのかなか分かりづらい。だけど、そうはいてもある程度即効性も考えながら、ある程度施策を作っていくのであれば、やっぱり選択して集中していくことが重要。例えばエントランスが全然違うよねということになると、変わった感が出てくる。そういう優先順位の考え方をとってもらいたい。それから事前の準備委員会のときに、委員がおっしゃっていたように、懐の深い部分を作るべきだということで、例えば今ある遊歩道は昔からあるものを改良して今につながってきているが、ときには対岸に渡って、そこから眺めてみたり、あるいは少し高い位置から見るために階段状のつり橋をつくってみたりというようなことをしたらどうかという話をしました。国立公園だからなかなか難しいのではないかという話があったと思うのですが、私はその話を、環境省の人ではないのですが、国の観光関係者に相談したら、「昔はそういう考えだったかもしれないけど、今はそういうものでも何でも提案してもらって、それを皆が良い方向に変えていく観光政策だから、国立公園だから何も手をつけられないなんてことは全然ありません。」というふうに言っていたので、そうは言っても現実にはなかなか難しいかもしれないけれども、やっぱり対岸へ行くとか、川辺を降りるとかいうことは、繰り返し出てきていることなので、ぜひ中に加えてほしいと思います。それから、私の稼業は運輸業です。運輸業は国土交通省で管轄をさせていただいていて、直接は関東運輸局に監督されながら仕事をしていて、我々は自動車交通部というところから指導されているのですが、その横並びの部の中に、観光部というものもあります。観光庁と一体的な仕事をしているような部署なのですが、山梨県を担当しているのが、関東運輸局の観光部。そこには山梨県出身者が何人かいて、昇仙峡のことも、運輸局でも「例えばこういう補助金がありますよ」というアドバイスだけでもできるので、そういった会合に入れてもらえれば運輸局としても成果が出せるというお話だったので、何らかのかたちで相談やアドバイスをいただいたらどうだろうか。それと、私どもの仕事柄、バスやタクシー輸送等の延長線上で、さっき委員が冒頭おっしゃっていたように、長潭橋からずっと昇仙峡を歩いてもらうのはいいけれども、これから、高齢者の皆さんとか、少し体の不自由な方のことを考えたりすると、ミニカーみたいなものがあるといいですね。国土交通省は全国の観光地に、グリーンスローモビリティの運用を導入したい、都市観光も自然観光どちらもグリーンスローモビリティを導入したいということで、今まさに候補地を募集している。そうすると時速10kmくらいで走る小型バス自動運転とかいろいろな最新技術などそういうものも、100万、1,000万円単位で補助をしてくれたり、要件によっては用意してくれるということもあるわけです。関東各地でもたくさん手を挙げている。山梨県ではまだ手を挙げていない。そういうようなものも、今この時期だから活用できるようにしていけると良いのではないのでしょうか。

【委員長】

そうですね。歩いて楽しむことに加えて、楽にというか、高齢者の方々が行きはいいけど帰りはしんどいということがあった場合に、それを補完するような役割が必要になってくる。それが従来の車や今はなくなってしまった馬車ではなくて、最新の技術を使ってということ。そしてやはり大事なのは持続的に長い時間をかけて取り組んでいくことと、成果の見えやすい即効性のあるものとのメリハリというものをつけてもらいたいということで、確かにそうなのですね。やっています、やっています、とは言うけれど、何も変わってないじゃないかということは、しばしば起こるので、ここ変わったねという即効性があることは短期間にやって、時間がかかる事業は事業として、引き継いでいってもらいたいなと思います。その辺のメリハリもつけていってもらいたいなと思います。

【委員】

皆様のご意見もたくさん聞かせていただきましたが、一番感じたのは、国立公園だということが、今自分の中で抜けていたことでした。ただ行くとやっぱり聖地という感じがすごくするのですね。その聖地をやっぱり、私は家族というものが大事なキーワードになってくると思いますので、家族がそこで、記憶として残る体験ができる、素敵な場所になってほしいなと思います。写真を撮ってつなげていくというアトラクションも面白いなと思いつつながら、子どもたちが見た岩に色を塗っていくとか、何か家族単位でできるアクティビティみたいなものが欠けているというのが一番感じています。子どもが体験して良いところだったというのを次の世代にも残すという意味で、家族というのをキーワードとして入れていただけたら嬉しいなと思います。

【委員長】

ありがとうございました。先程のご意見から、家族連れが楽しめる場所というのがテーマになっておりますが、このあたりはターゲットの問題なのだろうと思うのですね。結局今まであまり意識してこなかった、観光客というのは、バスで旅行会社が連れてきてくれるものだよという考え方が漠然とあったかと思います。やっぱり個人の時代になってくると、どんな人がどんな楽しみ方をするようにできたらいいよね、というのをこちらの心構えとして持っておく必要があるのかな。高齢者であれば先程の足の問題であったり、スピードの問題であったり、家族連れで言えば、思い出に残るということは一つ重要ですし、非常に良いキーワードをいただいたので、まさに子どもの大切さというのは、つまり次の世代に宝物を引き継いでいく、すごく重要な部分になりまして、先程のインスタ映えとは全く逆のことを言いますが、よくゼミの学生が記録より記憶に残る観光地という話をしております。つまり写真に撮って終わるような観光地には二度と行かないのです。もう一回行きたくなるような記憶に残る観光地にすること、実は我々の言葉で言うと体験ではなく経験なのですね。残るという意味で。そういう意味では経験価値の高い観光地にしていくには、いかに思い出深い場所として残すかということで、考える上で大事なキーワードをいただいたと思います。

【委員】

3年ほど前にミズベリング問題というのがありました。国交省の政策で補助金が出たのですけれども、そのとき荒川はミズベリングの対象にはなっていなかった。政府のほうでそれだけで10億くらいお金をかけていたということで、国もミズベリングをどのような観光地にしていくかということで動いていた。私はミズベリングの効果というのは、顧客がついているからこそできる効果だと思うのですよ。観光地化しようとしても駐車場はどうするのか、どこのお客さんを呼ぶのか。そうした河川を利用する中で、補助金はないけれども、申請の仕方によって、ミズベリングの観光化にふさわしい場所になると思っています。よってミズベリングでどのように楽しめるかというのは、県のほうもだいぶ考えてくれていますから、もう少しその辺りを拡大してやってみたいと思います。

【委員長】

先ほど、グリーンスローモビリティという話も出ましたし、今ミズベリングという話も出まして、そういう親水空間を楽しむための施設をつくるかという施策もあったりするので、そういういわゆる国が持っている施策とどのように連携していくのかということも課題の一つですね。委員の皆様から意見もあったように、結局、遊歩道から眺めるだけで、水辺を楽しんでないよねということで、川の楽しみ方というのも考え方としてあるのかなと思います。

【委員】

だいたい皆さんに一通り言っていただきましたけれども、せっかく昇仙峡リバイバルということで会議も2回目で、これまで本当に昇仙峡の悪いところをかなり洗い出してもらって、悪いことだらけ、いいことが一つもないという状況の中で本来始めるというのは良いことだと思うのです。悪いことは悪いで、いまさら振り返ってもしょうがないと思うので、新しいものを一つでも身になるものを構築できたら、本当に素晴らしい昇仙峡を取り戻せるのではなくて、新しい昇仙峡になる。これは理想論ですが、覚円峰が見れる空中展望台ができればいいなど。それから、お金はかかってしまいますが、ガラス張りの床から溪谷が覗けたりするようなものができればなど。昇仙峡は本当に目玉がない。昇仙峡ってどこに行ったらいいの、という質問が本当に多い。先程言ったように、長潭橋が入り口と分かっている人はほとんどいないですし、長潭橋も建て替えているので、あれが何年先にできるか分からない。最終的には長潭橋から遊歩道がつながるのでしょうけど、やっぱり昇仙峡って、昇仙峡に行ったらどこに行かなければいけないというのが前提でないと、シンボルマークが欠けているので、それが昇仙峡の弱さでないかと思います。今回リバイバル会議ということで、何か一つ、そうしたシンボルというものが見つければ、ありがたいなと思っています。

【委員長】

ありがとうございます。確かに先程の例でいうと、滝の写真さえ撮れば帰っても良いということにもなり得るので、難しいところではあるのですが、メインが分からない人はキョロキョロして、メイン

が分かっている人は、昇仙峡といえば、ここしかポスターにならないし、昇仙峡といえばここだよねというのがあって、そうすると下から登るのではなく、上から下りたほうがいいと考える人達もいる。それが滞在時間の短さにもなっているので、そういう意味では、これがメインだとしながらも、その脇役の魅力の発掘というのも同時にやっていかないといけないと思います。

【委員】

委員からも話がありましたけれども、国立公園なのですね。私たちも木一本切ることにはできないことはないということになっているのですけれども、昨年8月に山の日を制定して、甲府市が主催で山の日フォーラムを開催したのですが、昇仙峡へ国会議員の先生方5名くらいと、県の方、市の方が来られまして、いろいろ昇仙峡の現状の話をさせていただきました。そこに環境省の方がいらっしやいまして、国立公園内ということで厳しいところですから、木も切れないのですよねという話をしたら、それは違いますよ、と。状況によっていろいろ案を出してくれれば、可能なこともある、という話をしております、私たちも自分で何も手を打てないと思っていたのですが、そうではない。行政の方にもお願いしたのですけれども、もっと昇仙峡に来てもらえるようなかたちで、今まで難しかったことに関して、国のほうへ話をさせていただくとか、アプローチをしていただきたいと思います。

【委員長】

先程、本来国立公園というものは何も手が出せないものだと思っていたというご意見も出ておりましたが、すでに色分けができていて、ここならできるというのが決まっていますから、現に国立公園内に遊歩道も整備されていますし、それは規制の緩いところであって、われわれはそういう使えるところは使おうということで、一方で気を付けないといけないのは、SDGsという時代なので、あの木切っちゃえとは言えない。その辺は慎重さを残さないといけない。かつて我々が犯してきたような、後世に残せないような開発をしてはいけない。自分が大人になっても、自分の子どもに伝えていきたい、見せたいような宝物としての昇仙峡をどうやって後世に引き継いでいくかということを考えなければならない。観光庁も国立公園は守ることが前提の制度だから、ナショナルパークにしようと言っているわけですね。迎賓館でも公開しようという時代ですから、とにかく文化財や自然遺産というのはどんどん見せろという方向になっています。その一方で、我々は本当にそれでいいのかと考えなければならない、と同時に使えるものを今まで隠してきて使っていなかった、そのバランスをどう取るかということがとても大きな問題なのかと思います。子供たちにも残せる、誇れる昇仙峡と、少し喝を入れないといけない観光地としての昇仙峡とを考えていかなければならない。観光地でなくてもいいのです、私に言わせれば。今は観光地だけでももしかしたら、大事な自然的な遺産を観光がダメにすることだってあります、ということがあることを今の時代は考えなければならない。

【委員以外の者】

若い頃から旅行が好きで行くのですが、結局旅行って何かという思い出作りで、昇仙峡を訪

れてから何十年か経って、山梨方面に行く時に昇仙峡にもう一回行ってみたいと思うにはですね、昇仙峡で何をしたかという体験ですね。それから、昇仙峡というもののストーリー。そういうものがあればもう1回行ってみたいと思える。

委員が仰ったように、すぐやることと、それから時間がかかることを考えることが大切。本当に昇仙峡の体験として何ができるのか、すぐにできることを先に。ですから、ストーリーをもっと分かりやすくするとか、ソフトはすぐ手をつけられると思います。そういうことをやっていただければいいのかなと思います。ハード部分はちゃんとやらなければいけないですが、ソフト部分はすぐに手がつきますから。

【委員長】

今日は色々な方からメリハリということや、ソフトとハードということ、時間がかかることとすぐにできることといったことが挙げられました。確かに、芸能人が行って良かったという話で、プラタモリだったと思うのですが、私に言わせれば何で今頃昇仙峡に行くのだろうと思って見ていたのですが。確かに、タモリさんが行き、岩とかに焦点を当てながら見ると、違った昇仙峡の楽しみが有るのだねっていうことがありました。まさにストーリーは多様にあり、これにしなければならぬということはない。地質であったり、何か良いものがないか、ソフトの充実を図るといことも大事ですね。

【委員以外の者】

ミズベリングのような、体験できる何かがあればいいのではないかなと思います。自然に触れるとか、非日常的な空間を求めている方は眺めるだけでは寂しいのではないかなと思います。あとは、持続可能なものにするための体制作りということだと思います。そしてそのためには、情報とお金が必要になってくるとは思うのですが、見た目以上に大変なことだとは思っています。何かと何かを結びつけることが私たちの仕事のひとつだと思いますので、そういう段階になりましたら、協力していきたいと思えます。

【委員長】

今DMOなどが立ち上がっている中で、DMOは推進役ではなく調整役で、実は地域にはいろんな支援者がいるんだよと。行政や地銀さんの力などを借りたらどうか。国はそういう全体の調整役をDMOに期待しています。

いろんな資源やノウハウを持っている人たちのつながる場というのを、推進体制として持つべきものではないかなと思います。

【委員以外の者】

私達の協会としまして、11月に現地を視察しまして、景観を重点的に見る中で、心地よく感じられる景観にするにはどうすれば良いか考えております。環境省等の問題がありますが、松大木だとか倒木だとかがあるのを整備していかなければならぬということを感じました。また、ベンチなどが老朽化していたり苔が生えていたり、これではなかなか人が集まらないのではないかな

など。ただ、ベンチを新しくしただけで人が集まるわけではないので、その辺りをしっかりと考えていかなければなりません。景観を良くしたとSNSなどで発信すれば、一時的にはお客様は来るかもしれませんが、長続きはしません。昇仙峡の歴史と風土について考えていく中で、ここに来るとこんないいところがあるんだ、ということが今後必要なのではないかと思います。

【委員長】

観光というのは、総合力であってキラーコンテンツ1個でいいわけじゃないし、汚い部分を綺麗にすれば人が来るわけじゃない。そういう意味では、来る意味を作る、訪れる意味を作るということが非常に大事なのではないかと思います。もう一つは、次世代に残せる、誇れる昇仙峡をというのが目標なのではないでしょうか。汚いところは、地元の人に大事にされていないんだな、と観光客は見えてしまう。木も手入れされているし、遊歩道も整備されているし、手が入っているなどということを見るだけでも地元の人にとって大事なものだなと感じられる仕掛けになると思うので、もちろんそれだけで集客力になる、ということではないのですが。ダメなポイントを直しても人は来ないのですが、ダメなものを放置すると来た人の満足度が下がるということも事実です。来る意味を作ると同時に、我々がいかに昇仙峡を大事に思っているか、ということを示すメッセージを入れるという意味で昇仙峡を綺麗にしたり、景観美だとか施設の老朽化の改善などが必要なのではないでしょうか。その辺を踏まえて、具体的などは検討していきたいと思います。最後に事務局をお願いしたいと思います。

【事務局】

第3回会議でございますが、来月の2月17日(月)15時30分から、今日と同じ会場での開催を予定しております。次回は、大学生からフィールドワークの結果報告について発表いただくとともに、委員の皆さまにリバイバルプラン(案)をご提示させていただく予定です。事務局からの事務連絡は以上です。

【事務局】

以上をもちまして、「第2回昇仙峡リバイバル会議」を終了させていただきます。
ありがとうございました。